

大学生のアルバイト活動を通じた学習 —アルバイトの目標と活動の意識化の効果—

西 宏 樹 柳 澤 さおり

Learning Through Part-Time Job Experience for University Students: The Effect of the Goal of Part-Time Jobs and the Consciousness of Activities

Hiroki Nishi Saori Yanagizawa
(2009年11月27日受理)

問 題

若者の職業に関する社会問題として、派遣切りやフリーター問題などがあるが、近年、問題になっているのが早期離職である。新卒正社員の約35%前後が3年以内に退職しており、この問題は、企業や個人に悪い影響を及ぼしている。まず、企業にとっては、採用・人材育成コストが増加する、離職者の労働を他の従業員が負担することで生産性が低下する、離職率の高さが組織風土への悪影響に繋がる、など多岐に渡る。また、個人にとっては、3年以内では知識やスキルが身に付かないため再就職が困難であり、更に条件の悪い企業で働くというような問題が生じている。

早期離職問題は、働いていた個人に原因がある場合と企業側に原因がある場合の大きく二つに分類できる。個人に問題がある場合の例としては、「職場での人間関係を良好に保てない」「仕事の成果を上げられない」などが挙げられる。一方、企業側に問題がある場合の例としては、「従業員が満足できる職場環境が整えていない」「非倫理的な方法で利益を上げている」などが挙げられる。特に前者の場合は、個人が企業で働き始める時期までに、社会に必要な基礎的なスキルや態度などを学習することが一つの解決策になると思われる。

経済産業省(2006)は、上記のような、将来、社会で仕事をするために必要な基礎的なスキルや態度などを「社会人基礎力」と定義している。社会人基礎力とは、前に踏み出す力(action)、考え抜く力(thinking)、チームで働く力(teamwork)の3つの能力に注目し、個人が必要な場面でそれぞれの基礎力をどのように発揮できたか測定するものであ

る。経済産業省では、大学で学んだ専門知識を活用して企業等から与えられた実課題をチームで解決していく、PBL(Project Based Learning: 課題解決型学習)やインターンシップ等の実践型学習を通じて、実際に社会人基礎力の育成・評価を行うモデル事業を実施し、効果をあげている。しかし、このような大規模なプロジェクトに参加しなくとも、大学生が日常的に行う活動を通して、社会で求められる基礎的なスキルや態度などは、学べるはずである。実際に産業の現場で働くアルバイト活動によって、そのような学習が可能であると考えられる。

本研究では、大学生のアルバイト活動に注目し、以下の内容について検討する。

第一に、アルバイト活動を通して習得できる学習内容を調べる。第二に、その学習にアルバイトの目標が及ぼす影響について検討する。第三に、職務遂行活動の意識化の効果について調べる。そして第四に、アルバイト活動を通して学習することが、職業選択に関わる心理的状态に影響するのかどうかを検討する。

アルバイト活動による学習内容

大学生にとってアルバイト活動とは、学生の立場で産業場面での適応や仕事の方法を学習することができる活動である。アルバイトで働くことと組織で個人が社員として働くことは、多くの共通点がある。例えば、仕事の成果を求められること、その成果を上げるためには業務の内容を理解し、効果的に業務の遂行をしなければならないこと、他者との協調が必要なこと、などが挙げられる。このような共通点から、大学生はアルバイト活動を行うことで、将来就職した時に必要とされる基礎的な事柄を学習できると考えられる。

アルバイト活動による学習内容についての研究は、小平・西田（2004）によるものがある。

小平・西田（2004）は、大学生50名を対象に、アルバイト経験の意味、アルバイト経験が現在の自分にもたらした影響について尋ねる半構造化面接を行った。「意味があった」「影響があった」という45名の面接内容を検討したところ、①人間関係における成長（社会性・社交性の獲得、人間関係の重要性の認識、人間関係の広がり、対人葛藤経験による成長）②仕事に対する認識の高まり（組織についての理解、働くスキルの向上、仕事に対する意識の変化）③世界の広がり（未知の社会への発見、人間の多様性への気づき、教科書から実体験へ）④価値観・性格の変化（責任感の高まり、金銭に対する価値観の変化、マナーの取得、漠然とした内的変化）⑤将来・就職への展望（仕事の適性判断、就職活動に対する貢献、学生生活に対する貢献、将来展望の変化）の5つの学習内容を確認している。

小平・西田（2004）の研究は、アルバイト活動を通して学習できる内容を明らかにした点で価値あるものではあるが、その学習内容の分析が定性的なものにとどまっている。そのため、結果の一般化が難しく、また他の定量的データとの関係を分析することが難しい。本研究では、小平・西田（2004）の研究で見出された上記の5つの領域についての尺度を作成し、学習内容を定量的に測定する。

学習に影響する要因

アルバイト活動において、学習できる内容だけでなく、その学習を促す要因についての研究も過去になされてきた。

後藤・金井（2007）は、大学生12名を対象に、アルバイト経験を通しての自己の成長（アルバイトの意味づけ、職業観など）について尋ねる半構造化面接を行った。その結果、アルバイト経験を通して、リアリティ・ショック経験を持つようになった学生ほど、仕事における知識やスキルの獲得、経験による気づき、求められる知識やスキルの理解、今後の発見、に繋がることを示している。

見館（2007）は、日本マクドナルドで働く学生とフリーターを対象に、アルバイト経験を通じた自己の成長について尋ねるアンケート調査を行った。分析の結果、販売アルバイト経験を通して、学生やフリーターは建設的、創造的な討議と主体的行動といった基礎力を成長させていることが示された。見館（2007）は、その後、アンケートに回答した学生やフリーターの中から無作為に22名を選び、インタビュー調査を行った。そのインタビューの内容を分析した結果、建設的、創造的な討議を行うスキ

ルの獲得には、同僚が最も影響を与え、主体的行動の能力向上には、教育訓練が最も影響を与えていることを明らかにしている。

このように、学習を促す要因についての研究は、上記の通りいくつかなされている。しかし、それらの研究では、学習のプロセスが検討されてこなかった。そのため、どのようなプロセスで効果的に学習を促すことができるのか、学習の個人差が何故生じるのかについて、十分に明らかになったとはいえない。そこで、本研究では、学習の個人差や学習プロセスに関わる要因として、アルバイト活動の目標と職務遂行活動の意識化について注目する。

アルバイト活動の目標の効果

何か活動するときの目標の効果は、よく知られている。目標設定理論（Locke&Latham, 1990）によると、目標は、①目標に関わる事柄に注意を向ける、②目標の達成のための活動に専念する、③持続的に課題に取り組む、④戦略を展開する、ことを促す。このことからすると、アルバイトで目標とすることが違えば、注意する事柄や活動が異なり、学習内容が違ってくると考えられる。

本研究では、アルバイトの目標として、楠見・滝川（2002）を参考に、金銭獲得目標、人間関係目標、社会勉強目標の3つに注目する。

金銭獲得目標とは、学費や生活費など金銭の獲得を目指す目標である。人間関係目標とは、友人や異性などアルバイト先での人との出会いを求める目標である。社会勉強目標とは、将来を見据えて社会で適応するために必要なことを学習し、自己成長しようとする目標である。

それらの目標に応じて、アルバイト活動を通して学ぶ内容は違ってくるのが予想される。まず、金銭獲得目標を持ってアルバイト活動を行う学生は、労働によって金銭を獲得したいと望んでいることから、報酬をもたらす仕事の遂行に専念すると考えられる。これによって、職務遂行スキルや態度に関わる学習が促進されると予想される。

次に、人間関係目標を持ってアルバイト活動を行う学生は、人との関わりを望んでいることから、アルバイト活動における関係者間で、コミュニケーションを積極的に行うことが考えられる。このことを通して、人間関係や金銭などに関わる社会的価値観が拡張するような学習が促進されると予想される。

そして、社会勉強目標を持ってアルバイト活動を行う学生は、アルバイト活動を通して様々なことを学び、それによって、自己成長することを望んでいると思われる。そのため、仕事に関わることだけで

なく、その他の幅広い領域（人間関係や社会的規範など）に注意を向け、それらから積極的に学びとろうとすると考えられる。その結果、職務遂行スキル・態度に関わる学習や社会的価値観の拡張に関わる学習など相対的に幅広い学習を達成できると考えられる。

職務遂行活動の意識化の効果

同一の経験をしていても、そこから学びとる内容には個人差がみられる。その個人差を引き起こす一つの要因として考えられるのが、活動の意識化である。人間の活動と学習との関係については、これまでも注目されてきた。例えば、Kolb（1984）による学習サイクル理論がそれである。この理論では、活動経験を重視し、その活動経験から新たな知識が作り出される過程を学習と捉えている。

古川（印刷中）は、課題遂行時における活動というよりも、その活動を意識化することを重視している。そして、経験を意識的に、継続的に振り返り、経験を通して学習する習慣を持つことでコンピテンシー（業績直結能力）の学習が促進されるとしている。

職務遂行活動を意識化することは、成果を収めるために必要な行動の選択や注目、活動結果の内省を引き起こすと考えられる。従って、アルバイト活動で職務遂行に関わる活動を意識的に行った学生ほど、成果を収めるために必要な知識やスキルの学習が促されると考えられる。

学習することが職業選択に関わる心理的状态に及ぼす影響

大学生にとって職業選択は、学生時代の重要な課題である。清水と花井（2007）は、職業選択に関わる心理的状态の領域に関する尺度（キャリア意思決定尺度）を作成し、因子分析によって、決定不安・自信不足、葛藤、モラトリウム、相談希求、逃避、懸念（原文では、障害とされている）の6つの領域を確認している。

決定不安・自信不足とは、職業選択を決定することに対しての難しさや不安を感じている状態、あるいは自分の興味、関心、能力などの不足によって職業を決められない状態を示す。葛藤とは、複数の職業に興味を持っているために職業を決められない状態を示す。モラトリウムとは、職業人としての社会的義務や責任に対して課されることへの不満、今のまま自由でいたいと思う快樂志向があるために、職業選択に消極的な状態を示す。相談希求とは、職業選択問題の重要性を認識し、誰かに相談しようと考えている状態を示す。逃避とは、職業選択を考えていない状態を示す。懸念とは、職業選択に明確な希

望を持っているが、予期せぬ出来事で希望の職業に就けなくなるのではないかと考えている状態を示す。

大学生における職業選択に関わる上記のような心理的状态に影響を及ぼす要因としては、以下のようなものが考えられる。例えば、身近に社員として働いている先輩や友人が自分の将来について相談にのってくれること、就職説明会に参加すること、親（家族）から仕事に関するアドバイスをもらうこと、インターシップやアルバイト活動など企業で働くこと、などが挙げられる。なかでも現在、大学生の8割～9割が活動しているといわれているアルバイト活動は、先述したように、組織で個人が社員として働くことと多くの共通点があるため、そこで学んだことが職業選択に影響を及ぼすことになると考えられる。そのため、アルバイト活動を通して産業場面での働くための基礎的要件を学習した個人ほど、企業で働くことに自信を持ち、職業選択に積極的に取り組むと考えられる。従って、アルバイト活動を通して学習した学生ほど、今のまま自由でいたいと思っているモラトリウムや将来の職業のことを考えていない逃避といった傾向は低く、職業選択に積極的に取り組むと予想される。

方 法

調査対象者

2008年7月、公立大学の大学生148名（三年生116名、四年生32名、男性76名、女性72名）を対象にアンケート調査を行った。

調査内容

以下の内容について回答してもらった。

今までに経験したアルバイトの業種 今までに経験したアルバイトの業種（接客・サービス系、飲食系、ファッション・理美容系、事務・オフィス系、技術系、医療・介護・福祉・保育系、教育系、その他）を回答してもらった。

アルバイトの目標 楠見・滝川（2002）を参考に、アルバイトの目標について尋ねる3項目（金銭獲得目標：学費や生活費など経済的な理由で始めた、人間関係目標：友人や異性など人との出会いを求めて始めた、社会勉強目標：社会勉強をするために始めた）を作成した。各項目内容が自分に当てはまると思う程度を6段階（1. 全く当てはまらない～6. 非常に当てはまる）で評定してもらった。

アルバイトの活動の意識化 アルバイトの活動の意識化の度合いについて尋ねた6項目（例：新しい知識は早く覚えるようにしている、簡単なミスを防

ぐため丁寧に仕事をするようにしている、など）を作成した。各項目内容が自分に当てはまると思う程度を6段階（1．全く当てはまらない～6．非常に当てはまる）で評定してもらった。6項目の信頼係数を求めたところ、 $\alpha = .74$ であった。

アルバイト活動による学習 小平・西田（2004）を参考に、アルバイト活動による学習した内容について尋ねた52項目を作成した。作成した各項目内容が自分に当てはまると思う程度を6段階（1．全く当てはまらない～6．非常に当てはまる）で評定してもらった。

職業選択に関わる心理的状態 清水・花井（2007）の作成したキャリア意思決定尺度の39項目を使用した。各項目内容が自分に当てはまると思う程度を4段階（1．そう思わない～4．そう思う）で評定してもらった。

結 果

アルバイト活動による学習内容

アルバイト活動による学習の内容を調べるために、質問項目の回答に対して因子分析（最小二乗法、プロマックス回転）を行った。その結果、固有値（1以上）とスクリープロットの減衰傾向を基に、表1に示すように4つの因子が抽出された。その後、それぞれの因子に含まれる項目の解釈を行い、因子名をつけた。

第1因子は、「効果的な仕事の仕方を覚えた」「人を教育・指導できるようになった」など、仕事を遂行するうえで必要となるスキルや態度に関する項目が含まれていたため、職務遂行スキル・態度の獲得と命名した。第2因子は、「お金の重要性が改めて分かった」「世の中にいろいろな個性や価値観を持つ人がいることを知った」など、お金や人間に対する価値観への広がりに関する項目が含まれていたため、社会的価値観の拡張と命名した。第3因子は、「授業内容に関心を持つようになった」「資格を取得したいと思うようになった」など、大学での学業に対する肯定的な態度の獲得に関する項目が含まれていたため、学業に対する肯定的態度の獲得と命名した。第4因子は、「自分に向いていない職業がわかった」「自分の長所や短所が明らかになった」といった、仕事に関わる適性判断への理解を示す項目が含まれていたため、仕事の適性への理解と命名した。第4因子に含まれる項目数は2項目と少なかったため、その後の分析には使用しなかった。

性別、学年、アルバイトの目標、活動の意識化、そして上記のアルバイト活動による学習内容の平均値、標準偏差、変数間の相関係数は、表2に示されている。

アルバイトの目標と活動の意識化がアルバイト活動による学習に及ぼす影響

アルバイトの目標と活動の意識化がアルバイト活動による学習に及ぼす影響を調べるために、重回帰

表1 アルバイト活動による学習に対する因子分析

変 数	因 子			
	1	2	3	4
第1因子：職務遂行スキル・態度の獲得				
効率的な仕事の仕方を覚えた	.82	-.04	-.13	.04
人を指導・教育できるようになった	.80	-.06	-.04	-.04
物事をじっくり考えるようになった	.70	-.05	.22	-.03
責任感が強くなった	.70	.09	.01	-.03
人の話をよく聞けるようになった	.63	.09	.09	-.03
第2因子：社会的価値観の拡張				
お金の重要性が改めて分かった	-.05	.85	-.04	-.13
お金を稼ぐ難しさが分かった	-.16	.77	.20	-.14
世の中にいろいろな個性や価値観を持つ人がいることを知った	.13	.65	-.13	.18
自分とは異なる価値観を知ることができた	.03	.60	.14	.20
幅広い年齢層の人たちと関わることができた	.20	.54	-.16	-.02
第3因子：学業に対する肯定的態度の獲得				
授業内容に関心を持つようになった	-.04	-.04	.87	-.08
授業内容に対する理解力が高まった	.14	-.04	.77	.09
資格を取得したいと思うようになった	-.05	.08	.56	.06
第4因子：仕事の適性への理解				
自分に向いていない職業がわかった	-.11	-.07	.05	.80
自分の長所や短所が明らかになった	.04	-.01	-.01	.53

表2 性別、学年、アルバイトの目標、活動の意識化への平均値、標準偏差、相関関係

	M	SD	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
1. 性別	1.51	.52	—									
2. 学年	3.20	.40	-.19*	—								
3. 金銭獲得目標	4.72	1.38	-.15	.06	—							
4. 人間関係目標	2.83	1.51	-.06	.26**	.10	—						
5. 社会勉強目標	4.28	1.39	.06	-.09	-.06	.21*	—					
6. 職務遂行活動の意識化	4.34	.79	.14	.01	.01	.12	.42**	—				
7. 職務遂行スキル・態度の獲得	4.38	.98	.07	.06	.15	.13	.46**	.53**	—			
8. 社会的価値観の拡張	4.93	.89	.12	.00	.26**	.07	.34**	.47**	.44**	—		
9. 学業に対する肯定的態度の獲得	3.48	1.23	.10	-.03	-.05	.14	.27**	.23**	.33**	.31**	—	
10. 仕事の適性への理解	4.12	1.06	.05	-.11	.05	.06	.09	.28**	.19*	.20*	.22*	—

N = 132

注)「性別」は、男性を0 女性を1とコーディングした。

分析を行った。

第1ステップには、性別と学年の変数を投入した。第2ステップには、経験したアルバイトの業種の変数を投入した。このアルバイトの業種について、ファッション・理美容系、事務・オフィス系、技術系、医療・介護・福祉・保育系、その他、について経験した学生は10%以下と少なかったため、分析には使用せず、接客・サービス系、飲食系、教育系のみを投入した。第3ステップには、アルバイトの目標の変数を投入した。第4ステップには、活動の意識化の変数を投入した。第5ステップには、アルバイトの目標と活動の意識化の交互作用変数を投入した。この結果が表3に示されている。

まず、性別と学年は、アルバイト活動による学習にどれも有意な影響を及ぼしていなかった。アルバイトの業種については、接客・サービス系が社会的価値観の拡張と有意な正の影響を及ぼしていた。これは、接客・サービス系のアルバイト活動を経験したことのある学生ほど、金銭や人間関係の重要性を理解できたことを示している。

次に、アルバイトの目標については、金銭獲得目標が職務遂行スキル・態度の獲得と社会的価値観の拡張に有意な正の影響を及ぼしていることが示された。これは、金銭獲得を目標としてアルバイト活動をした学生ほど、仕事に関わるスキルや態度を習得し、職務遂行を通して金銭や人間関係の重要性を理解できたことを示している。一方、人間関係目標は、どの学習にも有意な影響を及ぼしていなかった。社会勉強目標は、職務遂行スキル・態度の獲得、社会的価値観の拡張、学業に対する肯定的態度の獲得の全てに有意な正の影響を及ぼし、かつ金銭

獲得目標と比較してその影響は大きかった。

そして、職務遂行活動の意識化もまた学習に影響を及ぼしており、職務遂行スキル・態度の獲得と社会的価値観の拡張に有意な正の影響を及ぼしていることが示された。アルバイトの目標と職務遂行活動の意識化の交互作用は、どれも有意な影響を及ぼしていなかった。

学習することが職業選択に関わる心理的状态に及ぼす影響

アルバイトによる学習が職業選択に関わる心理的状态に及ぼす影響を調べるために、学習内容を独立変数、職業選択に関わる心理状態を従属変数とし、重回帰分析を行った。その結果が表4に示されている。

まず、性別は、相談希求に有意な正の影響を及ぼしていることが示された。これは、女性の方が職業選択に対して、誰かに相談する傾向を示している。学年は、懸念に有意な負の影響を及ぼしていることが示された。これは、3年生の学生ほど、職業選択に対して懸念していることを示している。

次に、職務遂行スキル・態度の獲得は、相談希求に有意な正の影響を及ぼしていることが示された。これは、アルバイト活動を通して、職務遂行スキルや態度の獲得に関わる学習が出来た学生ほど、職業選択に対して、誰かに相談する傾向を示している。社会的価値観の拡張は、逃避に有意な負の影響を及ぼしていることが示された。これは、アルバイト活動を通して、社会的価値観の拡張に関わる学習が出来た学生ほど、将来の職業について積極的に考えたことがある傾向を示している。一方、学業に対する肯定的態度の獲得は、どの心理状態にも有意な影響

表3 学習の影響に関する重回帰分析

	職務遂行スキル・態度の獲得	社会的価値観の拡張	学業に対する肯定的態度の獲得
STEP1			
性別	.07	.10	.09
学年	.08	-.01	-.02
STEP2			
接客・サービス系	.02	.18*	-.01
飲食系	.06	.04	.06
教育系	.13	.11	.05
STEP3			
金銭獲得目標	.19*	.29**	-.03
人間関係目標	-.02	-.01	.09
社会勉強目標	.47**	.33**	.24**
STEP4			
職務遂行活動の意識化	.40**	.39**	.14
STEP5			
金銭獲得目標×職務遂行活動の意識化	.07	-.15	.07
人間関係目標×職務遂行活動の意識化	-.03	.02	-.08
社会勉強目標×職務遂行活動の意識化	.04	.05	-.01
F	8.58**	7.12**	1.72
R ²	.34	.30	.05

N = 132 **p<.01 *p<.05

注)「性別」は、男性を0 女性を1とコーディングした。

表4 職業選択に関わる心理的状态に及ぼす影響に関する重回帰分析

変数	決定不安・自信不足	モラトリアム	葛 藤	相談希求	懸 念	逃 避
STEP1						
性別	.18*	.02	.14	.25**	.08	-.13
学年	-.19	-.02	-.14	-.15	-.27**	-.02
STEP2						
職務遂行スキル・態度の獲得	-.17	-.13	-.12	.19*	-.03	-.16
社会的価値観の拡張	.01	-.03	.06	-.07	.00	-.23*
学業に対する肯定的態度の獲得	-.01	-.14	-.06	.06	-.03	.01
F	3.05*	1.51	1.68	4.04**	2.40*	3.44**
R ²	.07	.02	.03	.10	.05	.09

N=132 **p<.01 *p<.05

注)「性別」は、男性を0 女性を1とコーディングした。

を及ぼしていなかった。

考 察

本研究の目的は、アルバイト活動を通して習得できる学習内容を検討し、アルバイトの目標と職務遂行活動の意識化がその学習に及ぼす影響、そして、その学習が職業選択に関わる心理的状态に及ぼす影響について検討することであった。

アルバイト活動による学習内容

本研究では、大学生がアルバイト活動を通して習得できる学習内容を小平・西田（2004）の研究で

見出された5つの学習内容を参考に、定量的に測定した。因子分析によって抽出された4つの因子は、仕事の成果を上げるために欠かせない「職務遂行スキルや態度の獲得」、金銭や人間関係の重要性を理解する「社会的価値観の拡張」、アルバイト活動を通して学業の重要性を理解する「学業に対する肯定的態度の獲得」、自分の長所や向いている仕事を発見する「仕事の適性への理解」、に関する学習内容であった。

アルバイトの目標がアルバイト活動による学習に及ぼす影響

アルバイトの目標については、金銭獲得目標、人

人間関係目標、社会勉強目標の3つの目標に注目した。

まず、金銭獲得目標は、職務遂行スキル・態度の獲得、社会的価値観の拡張を促していた。金銭獲得を目標としてアルバイト活動をしている学生は、報酬を受け取るために与えられた仕事を確実に遂行することを心掛けていると思われる。従って、そのような職務遂行を通していくなかで、学生は仕事に関わるスキルや態度の習得及び、金銭や人間関係の重要性を理解できたのだと考えられる。

一方、アルバイト先で友人や異性など人との出会いを望んでいる人間関係目標は、どの学習内容とも関連がみられなかった。人間関係を目標としてアルバイト活動をしている学生は、人と出会うことには関心があったが、そこで出会った仲間と協力して仕事を確実に遂行することや、アルバイト活動の中から何かを学び取ろうとする行動がなかったのかもしれない。

社会勉強目標は、全ての学習内容を促していた。社会勉強を目標としてアルバイト活動をしている学生は、自己成長を望み、積極的に学習の機会を探し、様々な経験から何か将来に役立つことを学び取ろうとしている可能性がある。そのために、多様な領域で学習が進んだのだと考えられる。

以上のことから、アルバイト活動において、目標とすることが違えば、学習する内容も異なることが明らかになった。特に、注目すべきことは、社会勉強目標を持ってアルバイト活動を行った学生による学習内容の幅の広さである。一般的には、Locke&Latham (1990) などによって明らかにされている通り、具体的で明確な目標の方が、学習成果が高まると考えられている。ただし、その場合には、目標と関連する限定されたことしか学ぶことができない。これに対して、曖昧な目標は、目標設定の効果を十分に高めることができない (Locke&Latham, 1990) ことが分かっている。社会勉強というのは、曖昧な目標に分類できるであろう。しかし、そういった曖昧な目標だからこそ、特定の領域にとどまらない幅広い領域の学習が進むことがあることを本研究の結果は示唆している。

社会勉強目標と学習との関係について、もう一つ注目すべきことは、この目標を持ってアルバイト活動を行った学生ほど、大学での学業に対して肯定的な態度を獲得していたということである。「大学の勉強は、社会では役に立たない」という人が時々いるが、このような人は、大学で学んだことと、社会で生じていることを関連付けることができていないと考えられる。

学問、特に社会科学に関わる学問と社会とは密接な関連があり、その双方を関連付けることで、社会の仕組み、そして、大学での授業内容をより良く理解でき、広い視野、深い洞察を獲得できる。どのような人物がそういった関連付けることができるのかについて、現時点では明らかとなっていないが、アルバイト活動をする際に社会勉強を目標とし、様々な体験から何かを学び取ろうとする学生は、そのような関連付けを行う可能性があることを本研究の結果は示唆していた。

活動の意識化がアルバイト活動による学習に及ぼす影響

活動の意識化として注目した職務遂行活動の意識化は、職務遂行スキル・態度の獲得と社会的価値観の拡張を促していた。何気なく職務遂行活動を行った学生に比べ、確実に仕事を進めることを意識化して行った学生は、仕事の遂行に必要な行動の選択、それに関わる情報への注目や内省を積極的に行ったと考えられる。それによって、仕事に関わるスキルや態度の習得が促されたと思われる。また、職務遂行活動の意識化を通して、人と協力して働く重要性や改めてお金を稼ぐ難しさを理解したことが社会的価値観の拡張に繋がったのかもしれない。

何か活動を通して、社会に役立つ事柄を学び取るには、単に活動を経験するだけでは不十分である。学習を促すためには、その活動を積極的に意識化し、継続的に振り返る習慣を持つことが必要であると古川 (印刷中) は指摘している。本研究では、その指摘を支持する結果が得られた。

これまでのアルバイト活動と学習に関わる研究では、学習を促す要因については、なされてきたが、学習のプロセスはほとんど注目されてこなかった。その学習のプロセスとして本研究で注目した職務遂行活動の意識化は、学習を効果的に促し、そして、学習の個人差を引き起こす一つの要因である可能性が考えられる。

学習することが職業選択に関わる心理的状态に及ぼす影響

アルバイト活動を通じた学習が、将来の職業選択に関わる心理的状态にどのような影響を及ぼすのかについて検討した。

まず、アルバイト活動を通して、職務遂行スキルや態度の獲得に関わる学習を遂げた学生ほど、職業選択に対して、誰かに相談することが示された。この相談希求は、職業選択問題の重要性を認識し、誰かに相談しようと考えている状態を示すため、積極的な職業探索の行動といえる。職務遂行スキルや態度の獲得に関わる学習を遂げた学生は、アルバイト

活動を通して学んだことを将来の職業へ生かそうと考えている可能性がある。そのために、職業選択に対して、誰かのアドバイスを求めているのかもしれない。

次に、広く様々な社会的価値観を拡張した学生ほど、将来の職業選択に対して積極的に考えていることが明らかとなった。この結果は、アルバイト活動を通して様々な人達と関わるなかで、仕事に対する価値観や生き方などの多様性を学んだことが、将来の職業を考えさせる契機となったことを示しているのかもしれない。

一方、学業に対する肯定的態度の獲得は、職業選択に関わる心理的状态に有意な影響を及ぼしていなかった。アルバイト活動を通して、大学での学業に対して肯定的な態度を持つようになることが、必ずしも自分の将来の職業を考えることには繋がらないのかもしれない。

以上のことから、アルバイト活動を通して、産業場面で働くために役立つスキルや態度、広い視野を獲得することで、職業選択に関わる心理的状态に肯定的な影響を及ぼすことが明らかになった。

まとめ

本研究で明らかになった主な内容は、以下の通りである。

まず、アルバイトの目標が異なれば、学習する内容も異なるということである。特に、社会勉強を目標に活動する学生ほど、幅広い領域で学習し、大学での学業に対する肯定的な態度を持つようになることが示された。

次に、活動の意識化がアルバイト活動による学習に影響を及ぼすということである。職務遂行活動を通して学習するためには、単に活動するだけでは不十分で、その活動を意識化することが必要と考えられる。

そして、アルバイト活動で学習した内容が異なれば、職業選択に関わる心理的状态も異なることが示された。具体的には、アルバイト活動を通して、職務遂行スキル・態度を習得した学生及び、金銭や人間関係など社会的な価値観を広げた学生ほど、将来の職業選択に対して積極的に職業探索する状態にあった。

本研究では、大学生がアルバイト活動を通して、

社会に適応するための基礎的な事柄を学習できるということが明らかになった。学生のアルバイト活動は、学業生活の妨げや金銭獲得による自由の広がり悪影響であるという人もいる。しかし、アルバイト活動の全てが学生に悪影響を及ぼすものではない。目標設定や活動の意識化によってアルバイト活動は、社会に適応するために必要な基礎的スキルや態度などを学習することができる場になると思われる。そして、そういった学習を遂げることが、近年、問題となっている新卒正社員の早期離職など、若者の職業に関わる問題に対する解決策の一つとなりうると考えられる。

引用文献

- 古川久敬 (印刷中). モチベーションと能力学習 古川久敬 (編) 人的資源マネジメントー成果主義のもとでの個人能力とチームの力の形成 白桃書房
- 後藤智子・金井篤子 (2007). 大学生のアルバイト就業体験が個人のキャリアに及ぼす影響 産業・組織心理学会大会発表論文集23, 167-170.
- 経済産業省 (2006). 今日から始める社会人基礎力の育成と評価ー将来のニッポンを支える若者があふれ出す! 経済産業省 1-96
- 小平英志・西田裕記子 (2004). 大学生のアルバイト経験とその意味づけ 日本青年心理学会大会発表論文集 12, 30-31
- Kolb, D. A. (1984). *Experiential learning : Experience as the source of learning and development*. Englewood Cliffs, NJ: Prentice-Hall.
- 楠見孝・滝川智也 (2002). 大学生におけるアルバイトの意義ー動機, 選職, 仕事態度の構造 日本教育心理学会総会発表論文集44, 327.
- Locke, E. A., & Latham, G. P. (1990). *A theory of goal setting and task performance*. Englewood Cliffs, NJ: Prentice-Hall.
- 見館好隆 (2007). 顧客接点アルバイト経験が基礎力向上に与える影響についてー日本マクドナルドに注目してー ワークス研究所論文集 2, 1-14.
- 清水和秋・花井洋子 (2007). キャリア意思決定尺度の開発ーその1: 大学生を対象とした探索的因子分析からの尺度構成 関西大学社会学部紀要, 38 (3), 97-118.